

幼児教育者養成における器楽教育について

北 村 恵 子

Kitamura Keiko

平 澤 節 子

Hirasawa Setsuko

概 要

幼児教育者養成校における基礎技能「音楽」の中でも、特に器楽教育に焦点を当て、習熟度別クラス分けによる従来のMLによるグループレッスンとピアノの個人レッスンの授業方法に、新たに「課題クリア制」を導入したため、それを中心に述べたものである。その結果、学生・指導者および学内全体の意識が統一され、授業効果が確認されるものとなった。

キーワード：幼児教育・器楽教育・課題ノルマ制

I. はじめに

本研究は、幼児教育者養成校における基礎技能「音楽」の中でも、特に器楽教育に焦点を当て、本学の実践の概略を纏めたものに考察を加え論じたものである。

幼児教育者養成校は、2年あるいは3年の課程で、文部科学省および厚生労働省の示した基準により、現場で通用する幼児教育者としての器楽力を養成することが求められている。ここで器楽というのは、所謂簡易楽器を使用しての合奏のための器楽ではなく、子どもの歌や音楽を指導するために必要なピアノ演奏技術力のことを指している。幼児教育者になるために、諸外国では一つの楽器ができれば資格取得に繋がるところも多い中で、我が国においては基礎技能として求められている器楽の授業イコールピアノというところが殆どである。

本学でも器楽授業は、音楽全般の能力の中でも特にピアノ演奏技術を高めることに狙いを定めており、厚生労働省の求める保育士資格取得の必修単位は器楽Ⅰの1単位、文部科学省の求める幼稚園教諭二種免許状取得の必修単位は器楽Ⅰ、Ⅱの2単位で、それに向けて2年間で幼児教育者として足るピアノ技術力を養成しなければならず、入学時に全くのピアノ初心者が多い中でカリキュラム構成には至難の業が要求されている。他の幼児教育者養成校でも同様だと思われるが、本学でも指導方法や教材等に関する様々な工夫への努力が求められている。

本学では長い間、ML（ミュージック・ラボラトリー）を導入してのグループレッスンと個人レッスンの両面から指導を続けており、それなりの成果が上がっている。

今回は、今までの実施方法に加えて新たに導入した「課題クリア制」についての概略を述べ、今後のさらなる効果的授業展開の探索を目的として論じるものである。

Ⅱ. 幼児教育者養成校における基礎技能「音楽」について

① 求められている内容

幼児教育者になるための幼稚園教諭二種免許状および保育士資格取得に向けては、様々な指定・運営の基準が定められている。

特に厚生労働省の基準では、基礎技能「音楽」の内容として、音楽に関する基本的な知識や技能で次の4点を求めている。

- (1) 楽譜を読むために必要な基本的な知識
- (2) 歌い、演奏するために必要なソルフェージュや器楽に関する知識や技能
- (3) 様々な音楽活動を通しての楽しさや喜びの経験
- (4) 子どもの歌、簡易楽器、ピアノなど器楽による伴奏法など保育実践において必要な知識や技能

② 本学におけるカリキュラム上の位置

本学では、「音楽」の基礎技能として器楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、声楽Ⅰ・Ⅱ、音楽理論が設定されている。また、音楽コースを選択した学生のためにピアノ表現Ⅰ・Ⅱ、声楽表現Ⅰ・Ⅱ、ソルフェージュⅠ・Ⅱ、基礎音楽、楽典、和声法等が設定されている。

器楽に関しては、器楽Ⅰ・Ⅱは1年生前期・後期に、器楽Ⅲ・Ⅳは2年生前期・後期に組まれている。

また、資格取得に必要な器楽の単位は前述の通りだが、①で記述した(1)～(4)までの内容には、器楽だけでなく声楽や音楽理論の内容も含まれている。

しかし、それらだけではその目的を達することは不十分であるため、本学では教育・保育の内容・方法の理解に関する科目として設定されている「音楽表現指導法」との連携を図り、それらを総合的に子どもたちの関わりと結び付けるために機能する内容を盛り込み、学生たちにとって「音楽」の学びが、幼児教育者として総合的に子どもたちを理解し支援するための、確かな視野と技術を育てることに繋がることを企図している。

Ⅲ. 器楽（ピアノ）指導の実際

① 実施の目的および目標

本学の器楽指導の目的は、いうまでもなく保育士資格および幼稚園教諭二種免許状取得に向けて、そのための基礎技能を養成することにある。

幼児教育者養成校に課された各省庁が定める条件の下で、多くの難問に立ち向かっていると

ころが多いと思われるが、本学もそれに該当し、指導者側や幼児教育の現場が願う目標にまで学生たちのピアノに関する基礎能力を伸長するのに苦慮している現状がある。

そこで、本学でも過去に実施していた、入学してきた学生の基礎能力に即し、それを少しでも伸長させることを目的とした考え方を一部改め、資格取得のための必修と定められた単位の中身を、現場で要求されているギリギリの基礎技能ラインに設定することにした。つまり、現場で要求される音楽能力のうち、器楽については資格取得のための最低ラインを定め、それをクリアするために2年間でできるまで履修することを義務付けた。所謂、課題ノルマ制である。したがって、それをクリアできなければできないまで資格取得は不可能とした。

その理由は、入学時にピアノの経験の全くない学生たちにそれを要求するのは酷のようにも思われるが、能力不足の学生をプロとして現場に送り出すことは、養成校側としての責務を果たしたことにしないと考えられるからである。

そのためには、指導方法や教材選択に細心の注意を払うことが必要となり、指導者間の意志統一や、個々の学生に対する具体的指導方法の検討努力が一層求められることになったが、これは、短大を卒業しても使い物にならないといわれることのない学生を育成することを目的にして実施したものである。

なお、授業方法はML（ミュージック・ラボラトリー）やピアノを使用し、学生を習熟度別クラスに編成し、一コマ90分でグルーブレッスンおよび個人レッスンをする体制で、Ⅱの②の(1)～(4)の内容の達成を目指して指導している。

シラバスに載せた目標は、器楽Ⅰでは「幼児教育者に必要な器楽（ピアノ）の基礎を、グルーブレッスンと個人レッスンを併用して学ぶ。易しい幼児の曲の音階や和音の変化を理解して、保育の中で歌われる生活の歌を1時間に1曲以上マスターすることを目標にする」である。器楽Ⅱでは「器楽Ⅰで身に付けた基礎の上に、保育現場で歌われる幼児の曲をグルーブレッスンと個人レッスンを併用して学ぶ。また、リズム練習や譜読みなどのソルフェージュや楽典の基礎を並行して学ぶ。1時間に1曲以上弾けることを目標にする」である。器楽Ⅲでは「MLによるグルーブレッスンとピアノによる個人レッスンの両方が行われる。MLでは保育の現場で歌われる幼児の曲を中心に学び、ピアノによる個人レッスンでは個人の進度に合わせた基礎的な練習およびソナチネなどの曲まで学ぶ」である。器楽Ⅳでは「保育現場ですぐ弾ける曲数を増やし、弾き歌いや暗譜で弾くなど、実践力の向上を目指す。加えて、個人の進度に合わせたピアノ曲のレッスンを行う」である。

② 実施方法

本学幼児教育学科では、前述の通り、1年次に器楽Ⅰ・器楽Ⅱを履修し、器楽Ⅲ・器楽Ⅳは2年次に履修することになっており、器楽Ⅰは保育士資格取得の必修単位、器楽Ⅱは幼稚園教諭二種免許状取得の必修単位である。

また、資格取得のための必修単位が1年次に不可になった学生には、次の学期に再履修の時間を設け、それが2年間で取得できるまで再履修の時間を設けるなどして、丁寧に指導する

体制を取っている。

さらに、本学では資格取得だけでなく、卒業要件として器楽Ⅰ・Ⅱが必修と定められているため、必ずその2単位は取らなければならないことになっている。

・器楽Ⅰ・Ⅱについて

平成20年度の入学者数は106名であり、器楽Ⅰの授業は他のクラス授業やML教室の楽器台数および指導効率の都合上、8グループに分けて実施されている。グループ編成は、学生の過去のピアノ経験度別に組み、クラスによって一グループ約10名～15名、指導者は教員1名、MLTA1名の2名体制で授業を行っている。MLTAとは、MLの授業を補助するために、音楽コースの研究生1年目と2年目の学生がティーチング・アシスタントとして教員の手助けをするものである。現在2名の研究生がそれに従事している。

なお、グループ編成は、入学前ピアノ経験年数や、入学式直前のプレ・オリエンテーションでの簡単な調査を参考に決定し、初心者クラスと経験者クラスの二つに分けられている。

本学入学者は比較的ピアノ初心者が多いが、学習内容には大差はない。しかし、経験者クラスが子どもの歌を楽譜通りの伴奏で学習し、副教材でも基礎練習曲を多くマスターするのに対し、初心者クラスでは読譜の説明を受けながら、コード伴奏等簡易伴奏による子どもの歌を学習し、副教材での基礎練習も経験者クラスより多少ゆっくりと進められる。

・器楽Ⅲ・Ⅳについて

器楽Ⅲ・Ⅳは選択科目となっており、器楽Ⅰ・Ⅱを取得後に選択することができる。この科目は、一コマ90分のうちの45分はMLを使用してのグループレッスン、残りの45分はグランドピアノを使用しての個人レッスンとし、両方併せて1単位となっている。器楽Ⅳも同様である。

平成20年度に器楽Ⅲを選択した学生は総数166名のうち119名で、グループレッスンは一クラス約12.3名、個人レッスンは1グループ2～4名である。

なお、グループレッスンでの指導者は器楽Ⅰ・Ⅱと同じ2名であるが、再履修クラス等には教員1名とMLTA2名の3名で担当し、きめ細かい対応をしている。

③ 実施内容

器楽教材本としては、『子どもの歌ベストテン [改訂版]』板東貴余子／ドレミ出版社、『おとなのためのバイエル教本』板東貴余子・本間正治／ドレミ出版社、および、本学独自に編集した『ML教材資料』を使用している。

『子どもの歌ベストテン』は、現場で用いられる多くの子どもの歌が載っており、伴奏も初心者が困らないように簡易なものに工夫されている。

『大人のためのバイエル教本』の内容は、音階や楽典の基礎的な知識や、簡易で楽しい楽曲が多く配置されており、ところどころにバイエル曲が難易度を考慮して配置され、終了すれば

現場に出てからのピアノ技術力にはまず困らない程度の力が付くように編集されている。バイエル以外の曲目については、古典曲から今時の曲まで掲載されており、学生たちも順を追って楽しんで学んでいる様子が見られる。

『ML 教材資料』は前述の二冊を補助するために、学生の実態に合わせて本学独自に作成した資料であり、学生のレベルに応じて楽譜が選択できるように、さらに簡易な伴奏付けにした曲や高度にした曲を載せて対応している。また、さらに多くの曲を学びたい学生には、プリントで楽譜を配布する等の対応も行っている。

器楽Ⅰ・Ⅱおよび器楽Ⅲ・Ⅳの ML グループレッスンでは同様の本を使用するが、器楽Ⅲ・Ⅳの個人レッスンでは個々に応じた様々な曲を学ぶことが原則である。

- ・器楽Ⅰでは、現場で使用される子どもの生活の歌や簡易曲を中心に、ハ長調、ト長調、ニ長調、ヘ長調に移調して音階やコードネームを学習する。コードネームの理解が進むと、それにしがった伴奏ができるようになる。子どもの歌は、メロディー進行がシンプルで伴奏が簡単な曲から、徐々に指くぐりやポジションの変更が必要な曲、伴奏型が単一でない曲へと、少しずつレベルを高度にしていく。また、鍵盤を弾く時には必ず階名唱を付けるように指導している。

具体的には、子どもの歌に入る前に、メリーさんの羊、かっこう、チューリップ、きらきら星の4曲を、ハ長調、ト長調、ニ長調、ヘ長調での移調奏のトレーニングをする。始めの2曲は5指ポジションで弾ける簡単な曲で、続く2曲もドからラまでの6音構成で簡単なポジションのみで弾けるものである。移調奏と並行して行うのが、前述の4調の1オクターヴ&カデンツである。カデンツはハ長調ならC-F-G₇、ト長調ならG-C-D₇、ニ長調ならD-G-A₇、ヘ長調ならF-B-C₇というように、それぞれコードネームにしたがって簡易伴奏ができるように指導する。初心者はヘ音記号の読譜を苦手とする傾向が強く、それに配慮した形である。鍵盤楽器に慣れてきた頃を見て、『大人のバイエル教本』を使ってピアノ基礎技術（ト音記号、ヘ音記号の読譜やリズム理解）の向上を図り、徐々に子どもの歌を楽譜通りの伴奏で弾けるように導いていく。生活の歌については弾き歌いの指導も行う。

子どもの歌の必修曲は、前述の4曲以外におはようのうた、おべんとう、山の音楽家、おかえりのうた、大きな栗の木の下で、とけいの歌、七夕、こいのぼり、とんぼのめがね、どんぐりころころの10曲である。

- ・器楽Ⅱでは、初歩的な子どもの歌から徐々にメロディー進行が複雑なものへと発展していく。臨時記号（音階固有音以外のもの）が含まれ、シンコペーション等リズムも多様になってくる。伴奏型も簡易なものから1オクターヴのトレモロやアルペジオ、3連符、重音（和音が連続するもの）等、より高度になっていく。曲全体も間奏・後奏を含んだものや、短調の曲、アップテンポの曲等、幅広い内容になっていく。子どもの歌の必修曲は、森のくまさん、思い出のアルバム、おかあさん、あめふりくまのこ、まっかな秋、あわてんぼうのサンタクロース、うれしいひなまつり、犬のおまわりさん、大きな古時計の10曲である。また、器楽Ⅰ同様、

基礎力アップのために『大人のためのバイエル教本』も並行して扱われる。

- ・器楽ⅢのMLでは、引き続き保育現場で歌われる子どもの歌をマスターしながら、器楽Ⅱまでに養ってきたピアノ力を応用させ、さらにレベルアップを図っていく。

子どもの歌の必修曲は、こたりのうた、めだかの学校、南の島のハメハメハ大王、おはながわらった、みずあそび、しゃぼんだま、おばけなんてないさ、アイアイ、とんでったバナナ、さんぽ、小さな世界、世界中の子どもたちが、まつぼっくり、こおろぎ、小さい秋みつけたの15曲である。これらの選曲はこの時期に行われる幼稚園実習に対応したものになっている。メロディーには前打音等、装飾的要素が強く技巧的なもの、16分音符の3連符や両手による伴奏、ペダルの使用等、難易度の高い曲が増える。MLと並行して行われる個人レッスンでは、個人のレベルに応じた曲の指導と共に、ピアノ基礎技能向上のための練習曲指導も行われ、前期試験では就職採用試験を前提に、一人一曲ソナチネを暗譜で弾くことを課している。

- ・器楽Ⅳ MLでは、やきいもグーチーパー、北風小僧の寒太郎、ジングルベル、お正月、豆まき、ホホホ！、そうだったらいいのにな、ドキドキドン一年生、さよならぼくたちの保育園、ミッキーマウス・マーチ、ハイホー、カレンダー・マーチ、やぎさんゆうびんの必修曲13に加え、アイスクリームの歌、ビビディバビデブー、ヤンチャリカ、歯を磨きましょう、僕らは未来の探検隊、人間っていいな、ねむれないおおかみ、不思議なポケット、ドラえもののうた、宇宙船のうた、おなかのへるうた、ドロップスのうた、おつかいありさん、あひるの行列、あつまれファンファンファンの15曲の応用曲を設けている。季節の歌から行事の歌、ディズニーやアニメの歌等ジャンルは多様で、現場指導ですぐ使用できる選曲になっている。曲数は倍増したが、履修者の大半は積極的に応用曲の範囲までレパートリーを広げている。また、歌詞ばさみ（次の歌詞を小節の合間にはさんでいうこと）や、歌詞に振りをつけて歌唱指導をしたり、初見奏のトレーニングや即興演奏を取り入れているクラスもある。個人レッスンでは、さらなるピアノ技能の向上を目的にレパートリーの拡張を図っている。同時に、学生一人ひとりに対して、就職採用試験曲対応の入念な指導が行われている。

④ 学生の到達度・意識について

器楽授業では、必修曲（子どもの歌）や練習曲を一覧表にした「達成表」を基に授業が行われる。基準に達しないと再履修になる。

子どもの歌は器楽Ⅰ・Ⅱで最低でも25曲、器楽Ⅲ・Ⅳで28～43曲程度マスターする。『大人のバイエル教本』の基礎練習に関してはばらつきはあるが、器楽Ⅰの初心者クラスは平均12曲・テキスト30番程度まで、経験者クラスは平均20曲・テキスト50番程度まで到達する。器楽Ⅱの初心者クラスは平均12曲・テキスト50番程度まで、経験者クラスは平均20曲・テキスト70番またはそれ以上まで実力を付けている。器楽Ⅲでは、入学当初はピアノ未経験学生でも、一年間でソナチネレベルに到達させるために、前期試験で全員にソナチネを課している。この辺りまで力が育つと、保育士・幼稚園教諭として求められる必要最低限のピアノ技術

が獲得できることが明白になってくるので、選択科目であるにも関わらず、例年多くの学生が器楽Ⅲを履修している。器楽Ⅳを履修する学生たちはそう多くはないが、自分の技術力を一層磨きたいと考えており、毎時間のレッスンでは楽しそうに学習している姿が見られる。

器楽Ⅳが開始された当初「この1年半でどの位ピアノが弾けるようになったか。授業の成果や意識の面での変化があったか」を学生たちに問うた結果、・バイエルでも大変だったがソナチネが弾けるようになった ・楽譜を読むのに時間がかからなくなり、短時間で曲が仕上がるようになった ・ピアノを通して頑張り抜く力が付いた ・毎日ピアノに触れるうちに、もっと上手になりたいという気持ちが強くなった ・入学時は右手と左手が同時に動いてしまう程弾けなかったが、今では弾ける曲が増え、弾き歌いもできるようになった ・過去にピアノを習っていた時は嫌いだったが、ここで子どもの歌など弾けるようになり好きになった ・ピアノに対する意欲も入学前からは想像もつかない程湧いた ・難しい曲でも“諦めないでやる！そうしたら必ずできる！”という前向きな気持ちで取り組める等と答えている（H20.10.2に実施の、器楽Ⅳ履修者の一グループ20名への聞き取り調査から）。調査数は少ないが、これらの傾向からは、学生自身も自分の技術力や音楽力および人間力の向上を実感し、目的意識を自覚できたため、ピアノ授業への積極的関与の姿勢が生まれてきたのではないかと推測される。

これから、カリキュラム設定において毎時間や学期ごとの課題を明白にしたことにより、学生たちには幼児教育者のプロとしてやっていくための技術力養成への目標が定まり、一層の研鑽の必要性を自覚したものと考えられる。加えて、技術力向上以外にも、音楽力やレッスンを継続するための忍耐力、向上心の育成にも繋がることが分かった。

ピアノ技術の修得には、毎日の練習とそれを継続するための忍耐力が不可欠である。前述のように、ピアノ未経験者や初心者でも、日々の練習の習慣と音楽力の必要性を自覚させることができれば、自ら積極的に技術を磨き、その獲得の喜びが練習の苦しさを克服し楽しさへと変換するエネルギーになるものと考えられる。

さて、器楽Ⅰ・Ⅱを終了し器楽Ⅲを選択した学生たちへ、自分たちが経験した「課題クリア制」について聞き取り調査をした結果は、当初予想した通りのものであった。即ち、肯定的が63%、少し辛かったが29%、その他8%という数字である（H20.4.10実施・「課題クリア制」についての調査。119名が回答）。それによると、肯定的な答えの内容は、・初めは一週間で課題をやるのが大変だったが、取り組むうちに一週間で弾けるようになった ・毎時間決められた課題があることで、自分もついていかなければと必死になって練習できた ・毎時間のチェックは凄く目標になった ・初歩なのに、現場ですぐに使える曲が練習できて良かった ・一時間ごとに違う曲が弾けるようになり楽しかった ・一曲合格した時の達成感がとても良かった ・ピアノを練習する習慣がついた等であった。一方、少し辛かったとの答えの内容は、・進度が速かった ・課題が多く大変だった ・達成しないとどんどん遅れてしまい、焦りや不安を感じた ・できない人のペースで進めて欲しかった等であった。勿論、初めてピアノに触るという全くの未経験者にとっては、本当に大変な課題であっただろうし、焦りや不安を感

じプレッシャーはかなりのものであったことが分かる。また、その他の中には、決められた曲ではなく自分で選んだ曲を習いたかったというものもあった。

この結果は、入学試験にピアノの基礎力試験を課さない本学において「課題クリア制」を開始する当初から予想していたことは前述したが、ピアノ初心者で特に音符が全く読めない、あるいは指を動かすことによりかなり困難な学生の存在のあることは承知の上行ったものである。養成校側では、幼児教育者のプロとして最低限のピアノ技術力を短期間で養成するための必須条件として、大変でもそれを要求せざるを得ないところであり、大変と感じる学生を如何に指導するかが指導者側の最大難問であった。そう考えれば、開始当初としてはむしろ肯定的63%という数字を評価すべきであろうと考えられる。しかし、できなければできるだけ頑張るという意識を醸成するためのフォローの仕方に工夫が求められ、そのために再履修や再再履修の時間を設定し、ごく少数の学生であっても、複数の指導者がきめ細かく対応する体制を取っている。また、進度が遅れてもそれを引け目に感じることをないように、学内全体の雰囲気醸成することにも心配りをしている。その結果、再履修になった学生たちも、大変だったが課題をクリアすると、今まで頑張ってきたという達成感が得られ、その時点でピアノに自信を持つことができたという者が殆どであった。なお、Ⅱの②実施方法でも述べたが、必修の器楽Ⅰ・Ⅱを終了した後、選択科目であるⅢを全学生166名のうち119名と、約72%の学生がさらにピアノの技術を磨きたいと積極的に選択するという意識に変化したことは、評価に値するものといえよう。

因みに、平成20年度入学生の器楽Ⅰ終了後の授業評価アンケートによれば（H20.7.21実施・回答者100名）、この授業の内容や指導方法について86.5%の学生が肯定的に捉え、普通が10.5%、否定的が3%となっており、「課題クリア制」の2年目の導入としてはかなり効果があったものと見ることができる。これは、指導者側が導入方法や指導内容に1年目の経験を生かしたことや、1年先輩の様子を聞くなどして、学生同士の接触から得られた情報も大きかったのではないかと推測される。その結果が器楽Ⅲの選択者数に反映されたものと考えられる。即ちそれは、必修の器楽Ⅱが終了した時点で肯定的に捉えたのは63%であり、少し辛かった学生とその他の合計数が37%もいたのに、選択である器楽Ⅲには72%の学生がもう少し頑張りたいと自発的に選択したことでも理解できる。学生たちは案外、絶対こうしなければならないという条件を承知すれば、努力して頑張ることができるのではないかという表われと思われる。

⑤ 指導者側の意識

本学の器楽教育は、教授1名・非常勤講師3名・ティーチング・アシスタント（MLTA）2名の、計6名で実施している。「課題クリア制」導入以前は、指導者によって授業内容や進度に若干の差異が認められたが、導入後は全員の共通認識が得られたために授業内容が統一し、公平性・透明性のあるものとなり、学生からのそういった類の苦情は皆無となった。指導者側でも、全員で足並みを揃えられることは効果絶大で、全員でのミーティングも定期的で開催されるため、指導に対する不安も解消され安心して授業に臨めるようになった。そして、それは全員で一層

の授業改善への工夫を促す要素ともなっている。また、器楽教育は学内の全ての教育と共通認識を持ち進められる必要があるが、その点でも成功し、嘗て寄せられていた幼児教育学科全教員からの苦情も皆無になった。また、学ぶ楽曲や内容等が予め決まっているため、例えばオープンキャンパス等、外部への説明も容易になり、受験生や高校側の安心感に繋がっているように感じられる。

さらに、ML 授業全般をサポートしているティーチング・アシスタントにも好評で、「課題クリア制」では・課題が全て決まっていることで、各クラスの進み具合が明確になった ・自分のペースで予習や練習をしてくる学生が増えた ・授業をサポートする上で、ピアノが苦手な学生に対し、課題曲チェック前に指使いや音間違いが無いよう丁寧に指導・確認ができ、未達成曲を増やさないように配慮した等の返答があった。

以上からも分かるように、「課題クリア制」という共通カリキュラムを確立したことで、指導教員・MLTA・学生・学科教員、加えて、事務室教務係りからの苦情も全てなくなり、全学での意識統一が図れたことが日々の授業に効果的に反映されるようになってきたのではないかと考えられる。

⑥ 考察

今まで新・器楽カリキュラムについて述べてきたが、次に、「課題クリア制」導入後における現状の評価点、問題点、今後の視点について考察を加えたい。

A. 評価点について

まず、ML 授業における毎時間の課題曲を設定したことで、学生および指導スタッフ全員の意識統一が図れたことがあげられる。指導担当者によって学習内容や課題（宿題）の分量に差異があると、学生たちは不公平感を募らせるものだが、学年統一の学習内容が揃ったことで、安心して授業に取り組めたことが分かる。それは、授業評価結果からも証明されている。達成曲（達成目標）が提示されていることで、半期ごとの到達レベルが明確になり、学生の目標達成意識が高まり、授業で次に学ぶ曲を予習してくる学生が多く見受けられるようになった。次に、器楽Ⅰ→器楽Ⅱ→器楽Ⅲ→器楽Ⅳと継続した本学器楽教育の全体像を捉え易いものにした。加えて、現場ですぐに使える曲を配したことで、学生の学習意欲をさらに増幅させたことである。

B. 問題点について

新しく導入された達成課題は、比較的初心者に無理のないよう配慮して作られたため、ピアノ経験の多いハイレベルな学生にとっては、学習内容に物足りなさを感じている様子が伺える。課題を早めに余裕でクリアした学生には、副教材を個別に進めてレベルアップを図る工夫もしているが、入学前ピアノ学習6年以上の経験者が36%おり、彼女らのピアノ技能を一層伸ばすためのさらなる指導方法を考慮する必要がある。その一方で、入学前ピアノ学習1年未満の学生は37%おり、初心者の中には毎時間行われる課題曲チェックをプレッシャーに感じ、器楽に対する苦手意識を強くしている学生も存在する。苦手な学生ほど練習

時間が短い傾向もあり、彼女らが積極的に取り組むような動機付けが求められている。

教育に満足ということはないが、指導者側では常に指導方法への創意工夫を心掛けなければならない。

C. 今後の視点について

第一に、学生一人ひとりのピアノ技能に対応した、よりきめの細かいカリキュラムの確立に向けて努力する必要がある。入学者のピアノ経験度には大きな差があるため、現状での様々な工夫にも拘らず大変困難な課題が山積している。器楽Ⅰ・器楽Ⅱでは初心者と経験者とのクラス分けを実施しているが、MLのような全体授業では、学習内容が基礎的なものに偏り易いため、個々のレベルに応じた指導という点でのさらなる工夫が求められている。その点においては、器楽Ⅲ以降で行われるピアノの個人レッスンでの対応が大切となり、学生個々のレベルに対応できる学習曲の充実が必要である。現時点では初級・中級レベルに内容が集中しているが、今後、上級者のための曲目強化が望まれる。

第二に、器楽授業内容を一層精査する必要性があげられる。まず、現場との連携を密にし、授業課題にしている曲が現場の求めるものと本当に合致しているのかどうかの検討がなされなければならないだろう。また、器楽授業の目的はⅡの①の(1)から(4)に述べた通り、子どもの歌の伴奏や弾き歌いができることばかりではなく、様々な音楽活動を通しての楽しさや喜びの経験や、保育実践において必要な知識や技能を用い、子どもたちと総合的に関わるための能力が求められるものである。しかし、学生の中には課題をクリアすることだけが目的になってしまい、現場でいかに歌や音楽を子どもたちと共有するかについての本質を忘れてしまう者もいる。その点本学では、前述した通り「音楽表現指導法」でその弊害を除くための総合的な考え方や実践方法について、器楽授業と連動して言葉、歌、音、リズム、動き、即興演奏、簡易楽器の使用等について分かり易く指導が行われており、学生たちの自己表現能力育成にも心を砕いているが、加えて器楽授業においても、歌詞ばさみの実施や歌詞に合った振り付けを考える等の歌唱指導法の研究や、即興で動きに音を付ける等の内容導入も今後必要であろうと考えられる。また、声楽の授業とも連携を取る必要もある。しかし本来、技術的なことのみに拘るよりもむしろ音楽することに喜びを持ち、それを子どもたちに伝え共感するための技術を養うことこそが大切であり、一般的にいわれている「音楽ができる保育者」というより「音楽で子どもと遊べる保育者」の養成こそが基本であるだろう。それを常に考慮し、学生たちの様子を見ながら全体的な音楽力養成に対して様々な工夫をしなければならない。

第三に、指導者側の教育方法についてのスキルアップについて言及しなければならない。指導者は音楽のプロであると同時に、教育者としての資質保持が求められている。本学では複数の指導者が学生に対応しているが、学生個々に個性があるように指導者にも個性があり、いくら指導内容を統一しても直接の指導は夫々に任せられているため、学生の受け止め方にも違いがあるのが当然である。そこで、指導方法の詳細について研究する必要がある。幸い本学では、月1回の全員ミーティングでの指導方法の研究や、何か気になったことがある場

合は直ぐ連絡を取り合い、悩みを共有し検討する体制になっている。このように、MLTAを含めた全員の意識を揃え、学生たちの学習に役立つための指導方法向上にまい進することが求められている。

今まで述べてきたことは、基礎技能「音楽」を身に付けさせるために行われている器楽授業についてであったが、そこに学生と指導者という二者の関係が存在するため、技術養成のみならず人間教育という視点を欠かすことはできない。指導者は学生と関わる中で、学生自身に「自分には何ができるか」を気付かせてあげることが大切であり、大きくいえば、器楽教育を通し短大生活においての自分の生き方を見つけ出すことに繋がるような教育を心掛ける必要がある。

D. 基礎技能「音楽」に求められている内容との検証

最後に、厚生労働省の定める基礎技能「音楽」の求める内容が、本学の器楽授業で満たされているか検証してみたい。

まずⅡの①に記述した(1)楽譜を読むために必要な基本的な知識 (2)歌い、演奏するために必要なソルフェージュや器楽に関する知識や技能の2点については、レベルは兎も角としてほぼ満たされているものと考えられる。(3)様々な音楽活動を通しての楽しさや喜びの経験については、器楽授業でもある程度満たされるが、その他「音楽表現指導法」や「声楽」の授業等においてもその経験は実感されるものであり、様々な音楽活動や喜びという定義が難しいと同様にその内容やレベルの線引きは困難である。しかし、それらを総合して見た時に音楽活動が楽しく喜びを持てるような学内の雰囲気全体に醸成していく必要があるだろう。器楽授業の初歩では課題ノルマをこなすのが苦しくて、楽しむどころではない学生もいるだろうが、授業評価によれば苦しいが弾けるようになるのは楽しいというように変化してくるため、少し長いスパンで見えていく必要もあるだろう。(4)子どもの歌、簡易楽器、ピアノなどの器楽による伴奏法など保育実践において必要な知識や技能に関しては、本学が器楽をピアノと限定した教育方法を取っているため、ほぼ達成しているものと思われる。但し、簡易楽器については主に「音楽表現指導法」で扱っているため、今後は器楽授業の中にそれらも取り入れていけば、一層楽しい授業が展開されるものと思われる。今後の課題である。

以上、基礎技能「音楽」で求められている内容は、本学ではほぼ満たされているものと見ることができる。

IV. まとめ

幼児教育者養成における器楽教育は、それを実施している殆どの機関で多くの悩みや矛盾を抱えているものと思われる。それは本学でも同様である。

子どもたちと音楽を通して関わりを持つ幼児教育者には、国がラインを示さずとも、豊かな音楽性や技術を身に付ける必要のあることは誰が見ても明白であろう。音楽は幼児教育という総合的な見地からは、ほんの一部分を占めるものであるかもしれないが、それがまた子どもたちの成長に資する大きな要素であることも否めないため、何処の幼児教育者養成校においても、

特に力を入れている分野である。

しかし、ピアノという楽器の上達にはかなりの時間がかかるため、全くピアノの経験のない入学生を多く迎え入れなければならない養成校にとっては、限られた年限ですぐに現場のプロとして通用する学生を養成することは至難の技であろう。

今論文では、このような状況を鑑みて工夫した器楽授業「課題ノルマ制」について述べてきたが、これは、学生たちにとっては、幼児教育者のプロとして求められているある程度の技術力への目標が定まり、一層の研鑽の必要性を感じ取ることができたため、今まで以上に熱心に練習することに繋がったと見ることができる。さらに、全学生に対しての公平性という点でも効果的であった。また、指導者側でも、全員の足並みが揃うことで指導に対する不安が解消され、安心して授業に臨めるようになったことは評価すべき点である。しかし、進度の遅い学生や、さらに高度な技術を必要とする学生への対応には常に心配りする必要があるが、無制限に理想的な指導者数の配置が可能という訳でもなく、施設設備の問題等も抱えた指導者側に教育者としての工夫が求められているものといえよう。

幼児教育の現場では、プロとして総合的に優れた資質や能力を持つことが基本であろう。ピアノ技術に関しては、子どもたちと音楽活動を共有するための音楽力の一つと考えることが妥当であり、音楽能力全般との繋がりの中でそれを生かすことが求められている。しかし、ピアノ技術修得を通してそれが可能になることが多いため、様々な音楽体験との接点を多くし、総合的な音楽力獲得へと導くことが大切である。

幼児教育者養成のための教育に上限はないが、幼児教育者養成校では現場の状況を常に把握すると共に、現場に益する教育を発信する責務のあることも常に自覚して日々の授業を工夫する必要があるだろう。

【参考文献】

1. 2008 ケン・ベイン著 高橋靖直訳：ベストプロフェッサー 玉川大学出版部
2. 2008 増田ユリヤ：教育立国フィンランド流教師の育て方 岩波書店
3. 2002 北村恵子：音楽教育に求められるもの 上田女子短期大学紀要第25号
4. 2002 西澤昭男・内山澄孝・神原陸男・北村恵子・渡邊亜紀人：音楽教育の「不易」と「流行」－音楽教師の在り方を求めて 教育芸術社